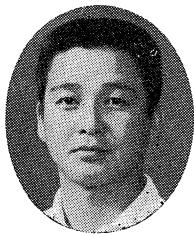


心のかけ橋

想 隨



尾下峰夫

山の秋、木々の葉が色づき始めるころ、子供たちの会話の中の一コマ、「今年の秋の遠足、どこへ行くんだべな」「うん、山歩きすつといいな」そんな声がちょっとわざとらしく職員室へ届いてくる。私たちはそれを聞き、思わず顔を見合せてニヤッとする。廊下へ出て行き、「K君、毎日、山で遊んでるべした。それでも山歩きは飽きないの」といじわるな質問をする。すると「だって先生、山歩きはおもしろいでした。おもしろいことは飽きないよ。それに山は同じ場所でも毎日、変わったことが見つかるよ」とまるで学者みたいなことを言う。そこで、秋の遠足は自然に親しもうと銘うち、いも煮会を兼ねた山歩きと決定する。遠足のお知らせの欄に野菜少々と書

き加えて通信を出す。当日、子供たちが持つて来た野菜を集めてみると売りに出せるほどある。「うわっ、みんなたくさん持って来たな」「うん、母ちゃんがよこしたんだ。余ったら先生、食べさせだってさ」うれしい心遣いである。その日の遠足は大成功。帰りの道々、会う人たらに余った汁をおすそわけ。私の前任校である山の分校での話である。

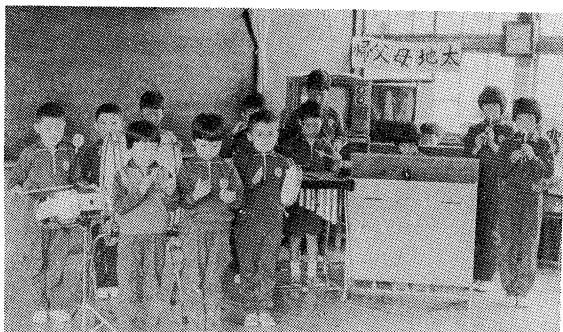
教師二名、児童十三名の小さな山の分校。私たちの最大の目標は楽しい学校ということであった。とにかく学校にいると楽しい、学校つておもしろい所だなど子供たちに思われる事である。そのためには時間の許す限り全員が参加できる楽しいつどいを持つことである。業間、合同授業、行事と積極

的に全員参加の場を設けた。そしていつの間にか、全校合奏の練習など四年生のT子を中心に自主的に行うようになってきた。私たちは演奏を聴きながら「これは楽しみだぞ」とほおをゆれる。さて、そのT子の話。ある朝、教室へ行くと、T子が赤い顔をして体温を測ると八度三分もある。「お前、すごい熱だぞ。帰つて寝つか」と聞くと「学校のほうがおもしろいから勉強していく」と言う。健康が心配ながらもうれしくなり「じゃ、やれるだけやつてみつか」となった。

このように子供たちが楽しく学校生活を送るのは、決して学校のみの力ではなく、父兄、地域の協力のたまも

的に行なわれたものではない。その間に、全校合奏の練習など四年生のT子を中心に自主的に行うようになってきた。私たちは演奏を聴きながら「これは楽しみだぞ」とほおをゆれる。さて、そのT子の話。ある朝、教室へ行くと、T子が赤い顔をして体温を測ると八度三分もある。「お前、すごい熱だぞ。帰つて寝つか」と聞くと「学校のほうがおもしろいから勉強していく」と言う。健康が心配ながらもうれしくなり「じゃ、やれるだけやつてみつか」となった。

このように子供たちが楽しく学校生活を送るのは、決して学校のみの力ではなく、父兄、地域の協力のたまも



心をひとつにつけて

さて、このような分校勤務で教えられたものは心のふれあいである。このふれあいこそが学校生活として社会生活の原点となるのではないだろうか。そうすると分校教育こそが教育の原点であるよう気がする。しかし原点ではあるがすべてではない。大規模校ではそれなりの良さがあるし、ふれあいを十分に持てるはずである。

教師と子供は、人と人との関係であり、それは結局、心の通じ合いであるからだ。また規模が大きくなればなるほど多くの困難をともなうにちがいないだろう。実際、今年度、六名の担任から二十三名の担任となり、とまどいのうちに一学期はなんとか終わつたというのが正直なところである。

今、二期を迎える、楽しい学級を、一対一の「つきあい」「心のふれあい」をと決意をあらたにしている。昨今である。心のかけ橋をめざして…。

(滝根町立滝根小学校教諭)